

地域で学び、地域と共に歩む松本大学の今。

松本大学学報

sokyu 蒼穹

2020.3 Vol.138



学びの成果を発表 (詳しくはP.08をご覧ください)

特集1 松本大学大学院の充実を目指して、
認可申請書の提出へ P.02

特集2 松商短期大学部
AP事業最終年度にあたって
..... P.04

- 卒友会 ～元気になって、つながって～ P.07
- 卒業研究・卒業論文発表会 P.08
- 「松本大学研究ブランディング事業」改め「松大ヘルスプロモーション事業」に
— 来年度から「地域健康支援ステーション」を中心に展開 — P.10
- スキー部 今年も大活躍!更なる飛躍へ P.14 ほか

松本大学大学院の充実を目指して、 認可申請書の提出へ

松本大学では、各種GPからCOC、ブランディング事業まで、2003年から始まる一連の競争的資金を獲得し、全国モデルと称されるまでの地域連携活動を進めてきました。これらは、PBL、課題解決型と言われるタイプの学修を、こうした言葉が使われる前から全国に先駆けていち早く取り入れ、大学・短大における「学生の教育」に重点をおいて改革を進めるものでした。しかし、社会は複雑化しその変化も早いいため、社会人の研究力量向上も含め、目の前の現実的課題の解決に向け、専門性を発揮できる「研究力量」を持った人材養成へのニーズも高まって来ています。

こうした状況を踏まえ、総合経営学部では新たに、大学院「地域経営研究科(修士課程)」の設置、大学院健康科学研究科では修士課程から博士課程への課程変更を計画し、この間文部科学省へそれぞれ複数回の事務相談に出かけておりました。三月中旬の認可申請書提出を前に、ここでそれらの概要を紹介します。

(松本大学 学長 住吉 廣行)



健康科学研究科 博士課程への課程変更

大学院健康科学研究科長 山田 一哉

松本大学大学院は、人間健康学部が完成年度を迎えた2011年4月に、「栄養」と「運動」の両面から人びとの健康の維持・増進に関わる研究・教育を行うことを目的に健康科学研究科修士課程として設置されました。当初は7名の専任教員と3名の大学院生でしたが、現在では専任教員は12名となり、在校生は2学年で12名、修生36名となっています。このうち社会人は17名で35.4%であり、これは全国平均10.5%に比べて著しく高い比率となっており、本大学院の特長の一つであるといえます。これまでに本大学院では「健康科学」に関する社会の関心の高まりとニーズに応えるために、より魅力的な大学院となるよう様々な改革を行ってきました。その具体的な内容については、蒼穹第132号(2018年9月28日発行)にて詳述しています。

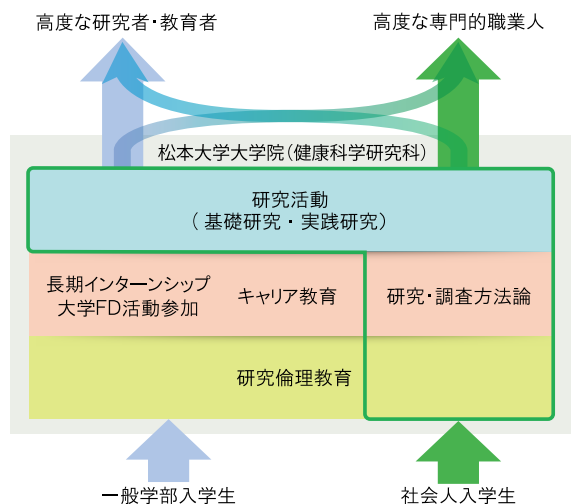


本大学院では設置当初から博士課程開設を構想していました。この間、院生や学部生からも本大学院で博士号を取得したいとの要望があり、実際、博士課程がないため修了者で他大学院の博士後期課程へ進学せざるをえない院生もいました。また、全国的にも博士課程に占める社会人大大学院生の割合は約37%であり、社会人の学び直しやスキルアップの要請も強くなってきています。一方で、「健康科学」分野の発展の重要性が、健康長寿の長野県という地域だけではなく、国内はもちろん国際的にも認識される社会状況にもなってきました。また、複数の院生が在学中にアメリカ等に海外留学を経験したり、オーストラリア留学後に社会人として入学してきた院生もいましたが、来年度には大学院として初めて、

ドミニカ共和国から社会人留学生を迎えることになり、国際化も少しずつ進む状況となりました。そこで、このような取り巻く環境の変化に呼応し、研究レベルのさらなる高度化とグローバル化に対応していくためにも、本学に博士課程はどうしても必要であろうとの判断に至りました。そうして、大学院設置10周年となる記念すべき2021年4月に博士課程の設置を目指し、3月に文部科学省へ設置の申請を行いました。博士課程設置が認可されれば、現修士課程は博士前期課程となり、新設される課程は博士後期課程となります。博士前期課程修了者は現在と同じく修士(健康科学)を、博士後期課程修了者は博士(健康科学)の学位を取得できます。また、松本大学としても文字通り最高学府の完成に至ります。

博士後期課程では、現行の修士課程の目的を継承した上で、「健康科学分野において、研究者として自立して研究活動を行うことができる人材、または、より高度な知識、技術等を修得し、基礎的・実践的課題の解決へ指導的役割を果たすことができる人材を養成する」ことを目的としています(右図)。したがって、博士課程全体としては、地域にいながらにして世界に発信できる研究を行い、より高度な専門性を持って地域課題を科学的に解決できる人材、換言すると、「(地)の人材を(知)の人材に」することが目標となります。

中央教育審議会大学分科会の答申では、特に博士後期課程の教育課程において研究倫理教育とキャリア教育の充実が求められています。そこで、本大学院では、「研究教育キャリア特講」と「健康科学演習」の科目を配置しています。「研究教育キャリア特講」は、研究者としての倫理観の育成、研究計画や研究費申請書の作成法、研究論文の書き方や効果的な研究発表の方法等、院生が研究を推進するにあたっての必要な知識・技術に加えて、大学教員になるとは、あるいは社会が必要とする人材とはどのようなものかなど、社会に出ていくための準備としてのキャリア教育の内容を含んでいます。「健康科学演習」は、栄養科学、スポーツ科学、人文・社会科学の3つの領域の中から、各自の専門分野の最先端の学問を教授するものです。院生はこれらの単位を修得後、最終的には「博士特別研究」により博士論文を作成し、その内容を博士論文発表会で発表し、学位論文審査基準に到達していると認められれば博士



の学位が授与されます。

博士後期課程の院生は、日本学術振興会の特別研究員に採用されれば在学中でも給与と研究費を得ることができ、独立した研究者への準備ができます。また、博士後期課程がある大学院には博士研究員

(すでに博士号を取得している研究者)が来て研究を活発に行うことがあるため、その場合、院生は年齢が近い研究者と切磋琢磨することで必然的により高いレベルにまで成長できると思われます。博士後期課程修了後には、社会人は元の職場でより専

門性の高い指導的立場として、新卒者は大学の助教・助手や専門学校など高等教育機関の教員や博士研究員、バイオ企業・食品関連会社・スポーツ関連企業等の研究職、医療施設等の専門職として活躍できると考えています。

地域経営研究科 修士課程の設置

地域に視点を据えた大学づくり

2002(平成14)年に開学して以来、松本大学は一貫して地域社会への貢献を大きな目標として教育・研究活動に邁進してきました。目標の第一は、実践力のある人材の輩出で、これまでの18年間で本学はこの目標を着実に達成してきました。

本学が果たすべき役割の第二は、単に若者を地域に供給するだけでなく、地域社会の活性化を通じて若者の地域定着を促進すること、換言すれば若者が定着できる土壌を育むことです。文部科学省によるCOC(知(地)の拠点整備事業)等での採択は、この点でも本学の努力と成果が高く評価された証と言えます。

初めて掲げる“地域”の看板

本学がスタートした18年前当時、地方私大・小規模大学・後発の大学・社会科学系の学部という、世間で取り沙汰されるおおよそすべてのハンディを抱えていましたが、私たちは、4年制大学が極端に少ない長野県において必要とされる大学づくりと真正面から取り組み、その答えが地域貢献・地域連携だったのです。したがって松本大学(=総合経営学部)は、その開学理念に“地域”というキーワードを鮮明かつ明確に盛り込みました。その後の歩みは皆さんご存じの通り、総合経営学部は総合経営学科と観光ホスピタリティ学科の2学科となり、さらに人間健康学部(健康栄養学科とスポーツ健康学科)が設置され、3年前には教育学部(学校教育学科)も加わり、地域貢献・地域連携の理念を実現する分野はどんどん広がっています。

このような本学の理念と歩みを振り返るとき、すぐさま気づくのは、“地域”を冠した学部・学科がどこにもないことでしょう。地域貢献・地域連携の分野で大きな実績を積み重ねてきた総合経営学部を基盤に、“地域経営”研究科を設置する理由の一端はそこにあります。

地域経営に関わる研究は待たなし

もちろん、“地域経営”研究科を必要とする社会的背景が根底にあってはじめてこの大学院構想が生まれたことは、言うまでも

ありません。

地方の疲弊が声高に叫ばれ始めてから、かれこれ40年以上が経過しました。当時の社会的懸念は、大都市圏以外の地域では経済基盤が突き崩され始めており、その結果として地方の政治や文化が衰退してしまうのではないかと、という点にありました。こうした漠然とした懸念あるいは心配が20年ほど前から、危機感へと変わり始めます。東京への一極集中が強く意識されるようになったことに加え、近年では地方自治体の消滅すら指摘される事態に立ち至っています。地方からの若者流出がその大きな要因です。

このことは、国や地方で実施されたあまたの政策や試みが、根本的にはほとんど効果のないものだったことを示しており、これまでの考え方や方法の単なる繰り返しでは問題の解決につながらない、そのような現実には私たちは直面しています。

従来の政策や考え方にとらわれない、地域社会の再生に向けた新たな方策と手法を産み出すための研究が求められているのです。松本大学が“地域経営”研究科の設置を構想する所以です。

扱うのは各組織の経営と地域課題

以上のような背景と経過からすれば、“地域経営”研究科がどのような中味になるかは、もはや自明とも言えます。

すなわち、地域経営の意味するところは地域社会全体の経営であり、同時に、企業・行政・住民(組織)といった地域社会を構成する主要な要素それぞれの経営です。地域社会全体の経営を考えると、当然そこには数々の地域課題、例えば地域経済、地域活性化、地方財政、地方行政、地域環境、地域観光、地域防災、地域福祉など目白押しの課題がある一方、個々の組織経営に着目すれば、企業経営、NPO経営、人材育成、ICT、農業経営等、経営学を基盤とした研究が

総合経営学部 教授 木村 晴壽

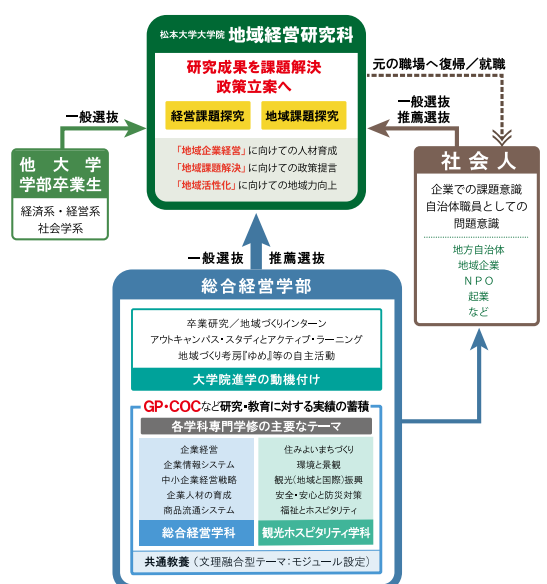
必要となることもまた明らかです。いまここで“地域経営”研究科のカリキュラムを詳細に紹介する余裕はありませんが、カリキュラム上に並ぶ授業科目が、列記したような課題と対応し、2つの意味での地域経営に相応しい編成になるのは間違いありません。

社会の総力を結集するために

学部での教育を基盤としながらも、大学院は何らかの意味で新たな地平へつながる教育・研究の場であるうに、扱う主要分野が地域経営となれば、この研究科で学び研究するのが若者だけ、ということにはなりません。地域課題や地域の諸組織に関わる経営のあり方を模索するというのですから、これは地域総出にならざるを得ません。地域の公的セクターに勤務する方々をはじめとしてあらゆる職種、あらゆる年齢層の地域人を院生として迎える計画であり、この研究科の定員が5名と極めて小規模に設定されていることからすれば、ほぼman-to-manの教育が受けられるはずで

す。ゆくゆくは本研究科の修士生が、地域社会に散在する力のベクトルを揃える役割を担い、信州の特徴を活かした地域社会を創造する中核になってくれることを期待しています。

大学院の基礎となる「総合経営学部」と「地域経営研究科」の関係を示す概要図



松商短期大学部 AP事業最終年度にあたって

松本大学松商短期大学部は2016年度に文部科学省による支援事業の一つであるAP (Acceleration Program for University Education Rebuilding: 大学教育再生加速プログラム) に採択され、それからの約4年間、その補助事業に取り組んできました。APとは、高等学校や社会との円滑な接続のもと、入り口から出口まで質保証の伴った大学教育を実現するため、先進的な取り組みを実施する大学等を支援することを目的としています。IからVまでの5つのテーマにわかれ、全国で合わせてこれまで78の大学、短大、高専が採択されましたが、本学はその中のテーマV「卒業時における質保証の取り組みの強化」に採択されています。実際に学んでいる学生はもちろん、就職先を中心とする社会の方々にも私たちが行った教育の質を保証することを目的に、学生が在学中に身に付けた学修成果を可視化(見える化)し、それを社会にわかりやすい形で示していくことに取り組んでまいりました。本学でのAP事業は2019年度に支援の最終年度を迎えるため、ここにこれまでの活動内容や成果などを報告したいと思います。

AP実施委員長・松商短期大学部 経営情報学科長 浜崎 央

学生が身に付けた学修成果を可視化する仕組み

まず、本学で学生が身に付ける学修成果は大きく2つあると考えています。1つは「知識や技術」であり、もう1つは「能力」です。本学では学科ごとに用意された専門科目と、学科共通の教養科目を用意することで社会において必要な「知識」の習得を目指すとともに、どのような職に就くとしても必要だと考えられる簿記・パソコン・語学といった「技術」の習得を松商ブランド基礎科目として用意することで、ディプロマ・ポリシーに従っ

た「知識や技術」をすべての学生が身に付けられるようにカリキュラムを整備しています。このような「知識や技術」は、成績評価基準に従ってそれぞれの授業によって評価され学生には成績表として配布されていますが、科目ごとに各成績評価の人数や割合を公表することとしました。それにより成績の相対的な位置づけを学生は知ることができ、より自分の成績や成績評価基準に興味を持ち、学習意欲を高めることが期待されます。

また、社会で活躍するためには、「知識や技術」を取得するだけでなく、それらをどのように活かしていくかといった社会人基礎力などと呼ばれる「能力」が重要視されるようになってきました。本学ではこれまでそのような能力の育成や評価を組織的に行ってきませんでしたので、このAP事業をきっかけに「能力」を可視化する仕組みである「コンピテンス指標の整備」を行ってきました。本学の学生に重点的に取得してもらいたい「能力」を「コア・コンピテンス」として「情報リテラシー」、「論理的思考力」、「コミュニケーション力」、「課題解決能力」、「チームで働く力」の5つに定め、それらを教員同士が共通の尺度で評価するためにコンピテンス・ルーブリックを作成しました。また、どの授業でどのコア・コンピテンスを身に付けることができるかをリストにしたコンピテンス配分表を作成することで、学生は配分表を確認しながら、自分に足りない「能力」を補えるような授業選択ができるようにしています。

コミュニケーション力 他者を尊重し、相互理解しようと努め、関係を分かち合うことができる

1	2	3	4	5
受容的態度で相手の意見を聞き、理解しようとする努力ができる。	受容的態度で相手の意見を聞き、正しく理解し、自分の意見を伝えることができる。	受容的態度で相手の意見を聞き、正しく理解し、自分の意見を伝えることができる。相互理解に努めることができる。	受容的態度で相手の意見を聞き、正しく理解し、自分の意見を伝えることができる。相手を尊重し、相互理解に努め、議論や発表の場でもそれを発揮することができる。	受容的態度で、相手の意見を人物理解や状況把握にも繋がるように傾聴し、正しく理解することができる。また、自分の意見を円滑に伝えようとする工夫ができる。相手を尊重し、相互理解に努め、自分とは異なる意見を持つ相手との議論や、発表の場でもそれを主体的に発揮することができる。

「コミュニケーション力」に対するルーブリック(評価基準)

学修成果をネットワーク上で収集・確認できる “eポートフォリオシステム”を再構築

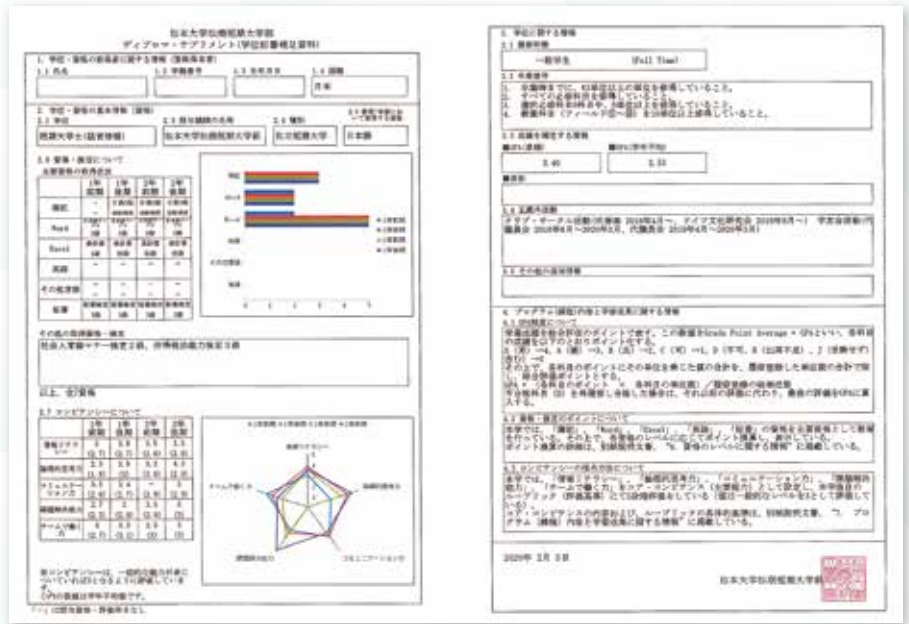
さらに、そのようにして身に付けてきた「知識や技術」および「能力」の学修成果を、学生は紙ベースの学修ポートフォリオとしてこれまでは収集していましたが、それらをネットワーク上で収集・確認できるように「eポートフォリオシステム」として作り直しました。これにより、学生はいつでもネットワークを通して自分の学修成果を確認できるようになり、これまでの振り返りを行えるとともに、今後の学修に対する意欲につながり、履修の参考としたりすることができるようになっていきます。

eポートフォリオシステムによる
コンピテンス評価結果



学修成果を社会に見える形で提示する「ディプロマ・サプリメント」の作成

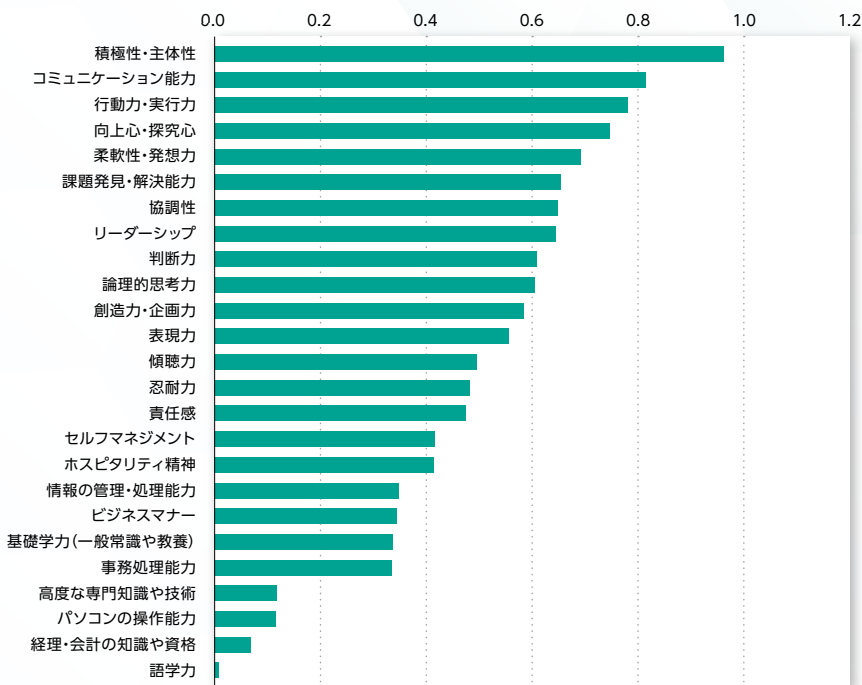
次に、そのように学生が身に付けた学修成果を社会に目に見える形で提示するための手法として、「ディプロマ・サプリメント(学位証書補足資料)」の作成に取り組んでまいりました。「知識」に関する学修成果についてはこれまで通り成績表によって提示することができますが、この「ディプロマ・サプリメント」はそれ以外の資格や検定といった「技術」や「コア・コンピテンス」と呼んでいる「能力」についての学修成果の結果だけでなく過程も含めて提示するための書類です。この補足資料により、これまでは明確な形で示すことができなかった「能力」についてもその成長過程も含めて提示することができるため、自分の持っている力を社会に示す就職活動時などに利用できるだけでなく、在学中にも学生自身がこれまで身に付けた力と現在足りていない力を知ることで、振り返りや意欲の醸成にも利用できるようになっています。



ディプロマ・サプリメント(学位証書補足資料)

「地域社会に貢献できる人づくり」のために点検・評価の結果をさらなる展開に活かす

〈企業アンケート結果〉本学学生に足りていない能力 (「社員に求める能力」の平均値から「本学卒業生の評価」の平均値を引いたもの)



最後に、このように取り組んできたAP事業について点検・評価するために、内部でのFD・SD活動はもちろんですが、地域の企業の方や他大学の有識者の方を委員とした外部評価委員会も年2回開催してまいりました(点検・評価の仕組み)。それに加えて「在学生」「卒業生」「地域企業」の方々にもアンケートを取らせていただき、それらを分析することで、この取り組みだけでなく、今後の本学の方向を決める参考にも利用していきたいと考えています。とくに企業の方々からのアンケートにより、積極性・主体性などの自ら働きかける力やコミュニケーション力などが本学の卒業生には足りていない弱みの部分であることなどが明確になってきましたので、今後はこれらを重点的に伸ばしていけるような方策を検討していきたいと考えています。

AP事業は2019年度をもって終わりとなりますが、支援事業としての活動が終わるだけであり、今後は、これまで実施してきた内容に対する点検・評価の結果を次に活かすことが大切だと考えています。教育の効果は簡単に図ることは難しく、その手段に絶対的な正解はおそらくないと思いますが、今回の事業で得たことを活かして本学の理念でもある「地域社会に貢献できる人づくり」のために何ができるかを教職員一同で一丸となり考えていきたいと思っています。

質の高い実践研究論文 多数の応募から 「松本大学教育実践改善賞」を3名に授与

全学教職センター長・教授 山崎 保寿

松本大学教育実践改善賞は、学校法人松商学園の創立120周年を記念し、学校教育における教育実践または地域の教育振興に実績が顕著な教員を表彰し、長野県全体の教育振興に寄与することを目的として2018年度に創設されました。

今年度は、一般教員部門に13名、卒業生部門に4名、合計17名の応募がありました。校種は、小・中・高校のほか、特別支援学級の教員など、年齢は20代から60代まで幅広い層からの応募でした。

応募論文の内容は、山間小規模校における小連携や小中連携教育、二つの事例との関わりから養護教諭の役割を追究した実践、総合的な学習の時間で「ひみつ基地」づ

くりを行い児童を成長させた実践、高校商業科目に反転授業を取り入れ効果的に改善した実践、自らの教育経験から日本留学を一層有効化させる提案を行った研究など、大変質の高い実践研究論文が多数寄せられました。

審査の結果、一般教員部門で2名、卒業生部門で1名、合計3名の方が松本大学教育実践改善賞に輝きました。受賞論文の内容は、教育実践の改善はもとより、長野県全体への波及効果や地域連携などの点で、他校のモデルとなり得る優れたものでした。

また、優れた論文の応募が多かったため、特別賞を11名に授与することにしました。特別賞の受賞論文には、WEB会議シス



テムを活用したミニビブリオバトルの実践、LD等通級指導教室担当者の先進的取組、総合的な学習の時間を核に他教科と関連させた実践、SDGsの活動によって生徒の思考力・判断力・表現力の育成を目指した活動、新学習指導要領の実施に向けた高校情報教育やアクティブ・ラーニングの実践などが選ばれました。

本賞を契機に、長野県教育の一層の活性化につながり、また、卒業生には教員としてのさらなる力量向上を目指すための指針の役割を果たすものになれば誠に幸いです。

～受賞者と論文名～

〈松本大学教育実践改善賞〉

一般教員部門

- **矢口 紘史** (大町市立八坂中学校)
「自然事象に繰り返しはたらきかけながら、素朴な見方・考え方からより科学的な見方・考え方を深化させ、思考力を育む理科学習」
- **小林 綾音** (南佐久郡南牧村立南牧中学校)
「“蓄積し、再構築する”授業・単元終末の「振り返り」の改善と充実—中学校3年理科単元のまとまりを意識した振り返りカードの工夫—」

卒業生部門

- **檀原 美咲** (大町市立大町南小学校)
「『わかること』に焦点を当てた体育授業づくりの在り方」

〈特別賞〉

- **古川 忠司** (長野県飯田OIDE長姫高等学校)
「『アクティブラーニング』による自己実現の実践—「自己存在」の再確認と周囲への「感謝」の醸成—」
- **新井 清規** (長野市立戸隠小学校)
「小規模校における「小中連携」の実践から」
- **大塚 美奈子** (上田市立北小学校)
「LD等通級指導教室のセンター的機能—地域のSST指導に活かせる研修のあり方—」
- **宮下 智恵美** (松本市立大野川小中学校)
「読んだことをもとに、英語で話したり書いたりする力を高める指導—ストーリー・リテリング活動を通して—」
- **宇佐 美昌博** (栄村立栄小学校)
「遠隔合同の学びを広げる—遠隔ミニビブリオバトル(書評合戦)の実践を通して—」
- **木田 達也** (安曇野市立豊科南小学校)
「自分だったらが生まれるために—総合的な学習での学びが他教科への深まりにつながる子どもたちの姿から学ぶ—」
- **村上 恵美子** (長野市立東部中学校)
「世界を変える一歩を東部から—SDGSの活動を通して育む、生徒が思考し、判断し、表現する力—」
- **由井 智也** (安曇野市立三郷中学校)
「時代の特色を捉え、総合・概念化する授業のあり方—室町時代の「にぎやか」とは」
- **春日 康志** (松本市立開成中学校)
「中学校LD等通級指導教室設置3年目の取り組み—複数配置校としての支援の充実—」
- **久保田 文彦** (長野西高等学校)
「マレーシアの東方政策による日本留学特別コースの現状から考察される日本留学の在り方」
- **岡田 悟** (長野工業高等学校)
「新学習指導要領「情報」実施に向けて—新学習指導要領解説(情報編)に対応した実践環境の提言—」

大学祭中止を乗り越えて

学生課 関 翔太郎

12月23日に校友会学祭局主催の「ミニ梓乃森祭」が本学第一体育館にて開催されました。本来ならば、10月12・13日に開催予定だった第53回梓乃森祭が、台風第19号の影響で中止となったことを受け、学生たちの強い要望によって開催することができました。当日は、各クラブによる公演や校友会



によるイベント、地域貢献大賞などが行われ、来場した学生を大いに楽しませてくれました。本来の大学祭に比べ規模は縮小しましたが、学生たちの思いが詰まった素晴らしい大学祭となりました。



140人余の教職に就いている松本大学出身者の会 梓友会 ～元気になって、つながって～

教職センター 相談員 石井 良治

2007年3月に卒業した学生が1人、教師として学校現場で仕事をするようになりました。松本大学出身の教員が生まれた年です。今では長野県内にとどまらず全国の公立、私立学校で140人余が働いています。この「梓友会(しゅうかい)」(教職に就いている松本大学出身者の会)は、2011年4月に発足しました。卒業生のサポートの機会、学生にとっては先輩からの情報を得る機会、そして同志のつながりの機会として、年2回開催されています。

近年は、現職教員の資質向上の機会として研修や、卒業生と現役学生、教職員とのつながりの機会としての懇親会を主な内容としており、参加してよかったと思える会、元気になる会となるよう運営しています。

教員としての資質向上をめざす研修会

1月11日に行われた今年度第2回目の研修会では、配慮を要する子に関する内容を企画しました。講師は特別支援教育に造詣の深い岸田優代先生(長野県若槻養護学校長)にお願いしました。

「授業中ずっとおしゃべりしている子、いませんか。机の中がぐちゃぐちゃな子、指示



が通らない子、なんかおどおどして後からそっとついてくるような子、学びの遅い子、気になる子がいますね。そして対応を考えます。よかったことをメモします。悪かったことを書き連ねても変わりません。配慮はしますが、特別扱いはしません。担任の先生がその子を大事にすると、周りの子たちもその子を大事にします。親はその子のプロですから、対応について教えてもらえばいいのです。そして親を労ってください。」など、岸田先生はご自身の経験を踏まえて話されました。



自分の目の前の児童生徒の表情や姿を思い浮かべていたのでしょうか。参加者からは、「うちのクラスにも同じような子がいます。そう、そうと思いながら聞いていました。」「高校でも配慮を要する子はいるので、今回はとても勉強になりました。」と頷きながら耳を傾けていました。

つながりを実感した懇親会・情報交換

懇親会には、卒業生10名、在学生4名、教職員10名が参加し、終始和やかな雰囲気笑顔がいっぱいでした。後半は、恒例の近況報告、1人30秒のスピーチです。気合いを入れて取り組んだ仕事のこと、失敗談、初めて任された仕事、学級担任としての苦労話ややりがい、部活動の成果、今年の抱負など内容はさまざまでしたが、学

校現場で奮闘している卒業生の話す様子にはどこか遅しさ、頼もしさを感じました。

この会に何を期待して参加するのか、アンケートの結果を見ると、研修13 懇親会8 教育最新情報5(回答数15、複数選択可)となっており、今後も期待に応えられる企画内容にしたいと思っています。



参加者からの感想

- 高校でも「配慮を要する子」はいるので、今回はとても勉強になりました。
- 懐かしい顔をも見られて楽しかった。研修もとても参考になりました。
- 今後活かせる勉強ができました。
- 卒業生の方々と話す機会があったことはとてもありがたかったです。横とのつながりもできました。
- 梓友会に参加するか迷っていましたが、参加してよかったです。とても勉強になりました。

松本大学 教員免許状更新講習のお知らせ

松本大学では2020年度、本学を会場に教員免許状更新講習を開催します。本学教員が講師を務め、必修領域2講習、選択必修領域9講習、選択領域21講習を開設予定です。

詳しくは3月下旬以降本学HPにて掲載いたしますので、ご確認ください。

担当:教職センター tel.0263-48-7260
email:menkyo.koshin@t.matsuo.ac.jp

卒業研究・卒業論文発表会

総合経営学科教務主任・教授 小林 俊一

松本大学及び松商短期大学部では、各学部、各学科にて、卒業研究・卒業論文発表会を実施しました。大学4年間または短期大学部2年間で、これまで学んだ内容を活かして研究をし、その成果としての研究発表を行いました。それぞれの学問領域や特徴を生かした素晴らしい発表となりました。

当日は、工夫を凝らした発表用のパワーポイントの資料を使いながら、一生懸命に発表する学生の姿が、とても印象的でした。また、人間健康学部では、ポスター発表での説明も行われました。

普段の学生生活とは違った緊張感の漂う時間で、研究に対する質問などにも頑張って答えている姿に、学生の成長を感じることができました。

総合経営学部 総合経営学科

氏名	ゼミ	卒業研究テーマ	氏名	ゼミ	卒業研究テーマ
牛越 葉月		「無印良品」の経営戦略に関する一考察	松澤 和也	室谷	ポイント会計と家電量販店のポイント戦略 SDGsから考えるごみ問題
熊崎 北斗	葛西		山岸明日香	室谷	
小澤 舜			大平菜美加	室谷	
赤羽 千尋		スターバックスコーヒーの 人材育成に関する一考察	大島 綾美	室谷	戦後の日本の人口動向 メディアを用いた地域活性化 マーケティングから見た地域活性化
長谷川美咲	葛西		塚原 京一	清水	
百澤 夢乃			藤森 龍平	清水	
石黒 達紀		e-スポーツの国内市場現況と 発展	内田 敦也	清水	キャラクターを用いた地域活性化 長野市中条における 地域活性化の展望
清水口 修	成		鎌田 菜	清水	
原 拓矢			赤羽 樹	清水	
石田 陽奈		ソーラーシェアリングの 現況と可能性	松山 瑞生	小林	移動平均線とローソク足について
須澤 和広	成		犬飼 晃洋	小林	
鈴木 文章			北野 伶奈	小林	
小松 央		第4次産業革命がもたらす 農業への影響	藤森 美咲	小林	N大・逆N大 今後どうなるか予想する
斉藤 万実			中山 結真	小林	
清水 裕太	成		長田 誠司	小林	
征矢 直也		有価証券報告書を用いた競合他社分析 日本アニメ文化の中国での動向	丸山 宏之	小林	株において利益の出やすい PPP・逆PPPについて
名取 翼			宮下 壮太郎	小林	
岩本あずさ	室谷		吉田 歩	小林	
猿田 真俊	室谷		山本 雅也	小林	サルでも儲かる株式投資



総合経営学部 観光ホスピタリティ学科

氏名	ゼミ	卒業研究テーマ	氏名	ゼミ	卒業研究テーマ
岩原 明夏		大学生の幸福感	小出 駿希		令和における大正ロマンの 現代的意義と分析 ～なつかしき未来の創造～
須甲 彩香	益山		西澤 秀哉	向井・ 増尾	
中野 初音			清水 信徹		
坂井 研太	益山	Instagramの利用状況	伊藤 未沙		伝統野菜の振興に関する一考察 ～松本地域の伝統野菜の活用について～
勝野 萌子			大島 桃子	山根	
丸山 渚	益山		小宮山優香	山根	
野溝 健介		自分で考えて動ける 接客アルバイトに必要な能力： 居酒屋での事例より	佐原 克彦		イベントの現況と展望 ～イベントから地域振興を考える～
丸山 凌	益山		平澤 拓海	山根	
森田 隼矢			古畑 篤志	山根	
山川 滯		「子供の育ち」を支える 地域づくりの可能性	西澤 広務	山根	介護保険制度における 「生活支援」を考える
松井 杏樹	向井		丸山 和馬	山根	
松澤 菜奈			金子 千尋	山根	
南澤 明音		中山間地域の 地域づくりの可能性 ～入山辺地区を事例として～	土田 郁哉	山根	
柳澤 望紀			山田 真衣	山根	
上條詩央里	向井		湯川 世夏	山根	
安藤 峻			相吉 浩行	山根	
奥村 周平	向井		鈴木 美香	山根	
早田 美穂			宮原 大河	山根	
平林 紗季				山根	



人間健康学部 健康栄養学科

氏名	ゼミ	卒業研究テーマ	氏名	ゼミ	卒業研究テーマ
小林 陸人	長谷川	日本プロバスケットボールリーグの 公式記録を用いた競技分析 ～日本人選手の育成・強化に関する考察～	高野 真衣	福島	一緒に食べたいのに食べられない 「会食恐怖症」
下沢 実央	成瀬	過去に流行したダイエット	宮下 千佳	矢内	長野県農業生産者の高齢化および 食品加工業の問題を解決するための 商品開発 ～新しい野菜漬物の商品開発と提案～
原 愛梨	石原	寒天ゲルの性状に及ぼす 植物油添加の影響について	小板橋瑠佳	山田	H4IIE 細胞への高効率 DNA トランスフェクション法とその応用
新田 雅巳	沖嶋	花粉・食物アレルギー (PFAS) の 主要アレルゲンMal d 1の ウェスタンブロッティングによる解析	近藤 史貴	高木	イペリンによる糖新生系酵素 PEPCK遺伝子の発現調節
中山 史帆		「信州の伝統野菜」である 源助がぶ菜漬けからの乳酸菌分離と 豆乳ヨーグルトの作製	古屋友梨奈	高木	学校給食を通じた 小学生の親に対する食育
塩入 瑛美			徳間 萌	藤岡	学校給食を通じた 小学生の親に対する食育
中島 青葉	藤岡		糖尿病教室と炎症性腸疾患 (IBD) 患者会における調査と比較	小口 茉菜	廣田
山岸 綾花			西澤 優奈	弘田	神奈川県湯河原町における 高齢者の肥満と生活習慣との関連
小沢 瑞希	木藤		藤森 郁実	弘田	
北村 希碩				弘田	



人間健康学部 スポーツ健康学科

氏名	ゼミ	卒業研究テーマ
波野アレクサンデル	犬飼	スポーツにおけるルーティンは競技パフォーマンスに影響するか
新原 徳子	岩間	インクルーシブ教育の現状と課題
大野 智裕	江原	小学生の骨強度に影響を与える要因について
清水 純也	河野	急性および慢性レジスタンス運動によるヒト骨格筋における遺伝子発現応答性の変化
花岡 純道	小松	スポーツや運動の継続における内発的動機づけの有用性
大槻 潤	齊藤	サッカーにおける身長差は試合結果に影響を及ぼすのか?
宮澤 友啓	田邊	高齢化率からみた歩行者用信号機の横断速度について
清水 宣之	等々力	VC長野トライデントの活動を参考に地域スポーツの発展を展望する 一地域とのつながりからみる地域スポーツの可能性一
原 大和	中島(弘)	応援が運動のパフォーマンスに与える影響 ~性差および人間の関係性に焦点を当てて~
武本麻里奈	中島(節)	日本と世界における性教育の実情 ~養護教諭の立場から行う支援とは~
塚原 彩香	根本	運動が睡眠に及ぼす影響についての検討
濱 楓弥	山本	交代浴の間隔時間の違いが疲労困憊した上腕二頭筋の等速性筋力に及ぼす影響
田中 慈	犬飼	選手選抜と強化法を探る ~2020東京体操日本女子団体~
菅沼 真洸	岩間	教師の言動が子どもの学びに向かう力に与える影響
杉浦 麗司	江原	「日本バドミントンはなぜここまで強くなったのか」についての研究
渡邊 希	小松	運動歴が運動習慣に与える影響
寺井 七瀬	齊藤	野球における四死球及び失策は勝敗や失点に影響するのだろうか?
宮澤 智保	田邊	運動継続率をあげるための効果的な教室の運営方法
村上 量子	中島(節)	口腔ケアの方法と効果を口腔内の酸性度から探る ~歯予防につなげるために~
勝野 正視	根本	室内環境温度の違いにおける身体面と作業パフォーマンスへの影響



松商短期大学部



氏名	ゼミ	卒業研究テーマ
片桐 康太	飯塚	ザ・ビートルズの長年にわたる人気の秘訣
小口 凱士		Scrachを使ったゲームプログラム制作
矢口 泰誠	矢野口	
村岡 拓人		
宮澤 来夢	伊東	広報紙作成を通しての情報収集・整理・発信
中野寿美玲		
加々見春花		
坂崎 愛泉	浜崎	3Dアプリケーション(VR)の開発
長崎 達也		

氏名	ゼミ	卒業研究テーマ
大谷 絢音	糸井	日本における男女の賃金格差の現状
福澤 有妃	小澤	K-POP
藤沼 奈津		
小林 恋奈		
石井都羽沙	廣瀬	T字状のオリジナルデザイン・福祉用具のユニバーサルデザイン
磯尾 夏希		
篠原 春花		
樋口優梨子	中村	ディズニー映画におけるグローバル化
山岸 愛和		

大学院修士論文審査発表会

大学院健康科学研究科 教授 福島 智子

2月12日、大学院健康科学研究科の修士論文審査発表会が開催されました。今年度は人間健康学部出身者2名、看護師資格をもつ社会人2名、計4名の発表となりました。学部時代から継続してきた研究の成果を堂々と発表した2名。社会人として限られた時間の中での精いっぱい努力が感じられる、素晴らしい発表だった2名。終了後の審査の結果、全員が修士生として承認されました。それぞれ進む道は異なりますが、さらなる飛躍が期待される発表会でした。

氏名	論文タイトル
三鬼由里江	スルフォラファンによる糖新生系酵素PEPCK遺伝子の発現調節機構の解析
大沢 育未	骨格筋における運動誘発性ヒストンH2B-GFPマウスを用いた検証
佐藤 圭子	がん患者の治療と就労に関する支援のあり方 一医療関係者へのインタビュー調査から一
武井 純子	松本医療圏における在宅看取りの現状と課題 一ケアマネジャーを対象としたインタビュー調査から一



「松本大学研究ブランディング事業」改め「松大ヘルスプロモーション事業」に — 来年度から「地域健康支援ステーション」を中心に展開 —

松本大学研究ブランディング事業推進委員長・副学長 等々力 賢治

文部科学省の肝いりで始まった私立大学研究ブランディング事業が、今年度をもって助成打ち切りとなりました。

しかしながら、企業従業員(=現役世代)対象に健康づくりを展開し元気な企業・元気な地域づくりに繋げようという、他に例のない事業の必要性和重要性については十分に自覚しているところです。そこで、以下のように、これまで蓄積してきた実績を踏まえつつ、改めて事業を継続、展開していきたいと考えていく計画です。



斬新なアイデアと実証的データを重視した成果と実績

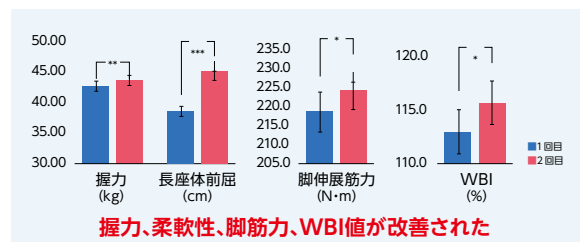
本学の事業が採択されたのは、文科省の助成事業開始2年目の2017年11月のことです。実質2年目といってよいでしょう。この間、松本大学らしい、斬新なアイデアに基づく事業展開と科学的・実証的データを念頭に取り組んで追求してきました。

前者の最たるものが、携帯型の活動量計とコンペサイトを利用した「タグフィットネス」を中核とする運動促進プログラムの創出と提案でした。これについては本誌131号(2018年6月29日発行)で取り上げましたので、ここでは、もう一つ本学らしいアイデアである「体力測定車」について紹介します。それは、通常、トレーニングルームなど機器類を備えた場で行う体力測定を、設

備がなく多忙な事業所などへ直接出かけていって実施できるよう、脚筋力計やエアロバイクなどを搭載したバン型の車両です。運動を行う前に脚筋力や持久性体力などを測定し可視化することによって、対象者が現状を的確に把握し自覚することができ、適切な運動量や行き方について理解を深めて取り組むことを狙っています。

これらは本学らしさを具現化したものであり、それによってさまざまな実証的データを得てきています。「体力測定車」を活用して図1のような成果を得ることもできまし

た。図1は、H社の130名超の従業員対象に、事業所ごとに年2回体力測定を実施し、各項目の改善値を比較したものです。搭載された機器類によつて的確に測定されたデータが、従業員の皆さんの積極的な参加と関与を促したのは間違いのないと言ってよいでしょう。



〔図1〕H社の場合 年2回体力測定を実施 ※体力の改善値が大きい従業員に特別賞あり

2年間の実績と成果を踏まえさらなる発展へ

そうした事例にくわえ、本事業には、一昨年度は17社1自治体、約460名の方が、また、昨年度は20社3自治体、約1000名の方が、それぞれ何らかの形で参加してくださいました。これは、本事業に対する期待の表れであると捉えてよいと思います。

文科省の助成は打ち切られますが、本学としては、この成果と実績を踏まえつつ来年度以降のさらなる発展を見据え、以下のよう3つの事項を柱にした改革案に沿って事業を継続、展開していくこととしています。

まず1つ目の柱は、事業内容の多角化です。本事業の主眼は「タグフィットネス」を中核に企業従業員の健康づくりを進めるといいますが、さきのH社のように、体力測定単独でも大きなニーズがあると推測しています。そこに栄養指導を絡めることができれば、本学の持つ優位性の確保に繋がるのは間違いありません。また、昨今、各企業が進めている「特定保健指導」についても取り組んでいく予定です。そして2つ目の柱は、事業の収益化、企業化です。現代社会に

おける健康ニーズの高さは極めて高いにもかかわらず、供給される健康づくりの手法・内容は“玉石混交”と言ってよい状況にあります。それに対し、研究機関である大学が研究データ・成果を背景に関与するとすれば、他の根拠希薄なものに比べて説得力があり、競争優位に立つことができるのは疑いありません。(先に紹介した事例は一つの証左であり、その商品化の可能性を想起させるに足るものであると判断しています。)

地域健康支援ステーション事業として展開

そして3つ目の柱は、従前より、本学の地域の健康づくり担当・支援部署として活動を展開してきた「地域健康支援ステーション」に事業内容を移し推進することです。それによって、そこに所属するスタッフの力もくわえ、さらに拡充、発展させていくことが可能になります。それを前提に、来年度からは、

事業の呼称を「松本大学研究ブランディング事業」改め「松大ヘルスプロモーション事業」とします。

この間に得られた成果と実績について縷々述べましたが、それでもまだまだ不十分であるのは自覚していますし、その商品化を含め実践に移すことについては猶更

です。しかしながら、取り組みを進めることが本学の位置する地域の住民・企業・自治体の発展に資するものであることは間違いなく、それを念頭に、さらに歩みを進めたいと考えています。

これまで以上にご理解、ご支援くださいますよう、切にお願いいたします。

研究室紹介

健康科学研究科長・健康栄養学科 教授
山田 一哉

未知にチャレンジするおもしろさ

山田ゼミでは、糖質代謝酵素をコードする遺伝子や24時間を刻む時計遺伝子の発現を指標にした分子生物学的研究を行っています。何だか難しそうって思うかもしれませんが、今までに明らかしてきたことは、早起きをして日光を浴び、しっかり朝食をとることが健康長寿につながるということです。

研究は、未知の事柄を既知に変えるプロセスで、非常に知的な生産活動です。ただ、正確な実験技術を身につけて精緻な実験計画を組んだ上でも、まだまだたくさんの試行錯誤が必要です。また、自分が一生懸命研究を行ったからといって、必ずしも思い通りの結果が出るとは限りません。しかし、子どものように純粋な目でデータを見て、新しい仮説を設定し、生命の秘密を少しでも明らかにできたときには、何物にも代え難い幸福感・達成感を感じます。そのために

最も大事なことは、未知にチャレンジすることをおもしろいと感じることだと思っています。

ちょっと堅苦しくなったかもしれませんが、私のゼミでは「よく学び、よく遊ぶ」「一人一人がハッピーになること」をモットーにしています。ゼミ

では、実験以外にも食べ物やスポーツや映画や小説や音楽や絵画やお笑いなどの様々な話題と、BBQなどのレクリエーションで盛り上がり、和気あいあいと楽しく過ごしています。



【経歴】大阪大学大学院医学研究科博士課程修了。博士(医学)。大阪大学医学部助手、米国 Vanderbilt大学医学部博士研究員、福井(医科)大学医学部助手・助教授を経て現職。【研究課題】栄養素とホルモンによる遺伝子の発現調節【専門分野】生化学・分子栄養学

松本大学図書館の取り組み

地域を考える公開講座を開催



松本大学図書館長
伊東 直登

1月25日、「あなたのまちのスーパー司書」と題して、図書館公開講座を開催し、70名余の皆さんが聴講しました。講師の砂生絵里奈さんは、埼玉県の鶴ヶ島市立図書館で長く司書を務めてこられ、日本図書館協会が認定する認定司書の一人です。認定司書は、厳しい選考基準をクリアした、実力も熱意も高い全国屈指の司書で、各地で図書館や地域を支える活動をしています。講演では、そうした全国の事例紹介と、ご自身が関わってこられた、街中に本を持ち寄って私設図書館をつくる「つるがしまどこでもまちライブラリー」の活動をご紹介します。司書の活動が、地域と繋がる多様な柔軟なものであることを認識できた貴重な講座でした。

松本大学図書館は、学術書から趣味の分野まで、約11万冊の蔵書を誇ります。学校関係者はもちろん学外からの利用もでき、視聴覚コーナーや個人・グループ学習用の専用スペースを設置して地域の図書館として大きな役割を担います。

読書月間をPR、初参加で2賞受賞

松本大学図書館 司書 中西 悠

日本で開催される図書館関係の最も大きなイベント「図書館総合展」のポスターセッションに初めて参加しました。毎年、大学図書館をはじめ各団体が出展し、取り組みなどを紹介している場です。今回は109の団体が参加しました。当館は毎年開催している読書月間の取り組みを紹介しました。展示、



講座、謎解きイベント、学生協働の4つの取り組みを学生スタッフのアイデアをもとに冊子にまとめ、ポスターとして掲示しました。手に取って見られることで、分かりやすいと好評でした。広く図書館の活動をPRすることができ、丸善雄松堂賞、カルチャー・ジャパン賞と2つの賞を受賞しました。

地域連携活動

高大連携推進事業

「バレンタインスイーツ2020」今年も大盛況

県内高校生と本学の学生が合同で行う販売会「バレンタインスイーツ2020」を2月8日、9日に山形村の「アイシティ21」にて開催しました。高大が連携して行う冬のスイーツ販売会も7年目を迎え、地域の方々の中にはこの販売会を目当てに訪れるお客様も多くなりました。今年は県内4校の高校生と本学の短期大学部金子ゼミ、支援会ゆにまるの学生が参加し、また兵庫県の高校も直前に参加を申し出るなど、賑やかなイベントとなりました。



会場には高校生や大学生がアイデアを出し、各地域の食材を生かしたスイーツが30種類近く並びました。本学ゆにまるの学生は、市内上土商店街の各老舗のお菓子をセットにした「上土物語」を販売し、松本の銘菓と商店街のPRを行いました。売り場は、高校生・大学生のオリジナリティ溢れるスイーツについての説明に熱心に耳を傾けて購入する方々で賑わいました。参加各校の商品は午後には完売が続出し、今年も盛況のうちに終了しました。

(観光ホスピタリティ学科 教授 大野 整)

まちづくり活動

まちづくり学習会～学生と住民が共に学ぶ～

観光ホスピタリティ学科の増尾・白戸・畑井・向井ゼミでは、上土町をはじめとした松本市中心市街地の活性化に取り組んでいます。今回、学生と住民が共に学び、今後のまちづくりの実践に繋げていくことを目的として連続学習会を開催することとなりました。



学習会は、第Ⅰ部「これまでのまちづくりを振り返る」、第Ⅱ部「情報発信とまちづくり」、第Ⅲ部「女性部が取り組むまちづくり」の3部構成となっています。先日、第Ⅱ部として「まちの魅力を引き出す写真の撮り方とは」という 주제로学習会を開催しました。当日はプロカメラマンの山田毅氏、写真機店を営む増田博志氏を講師にお招きし、写真の撮り方や心構えについてご講演を頂きました。その後、参加者全員でまちに出て写真を撮影し、その写真を素材に「より良い情報発信に繋がる写真とは?」をテーマに議論が交わされました。現在、学生は、住民の方々と協力しながら、まちの風景を素材にしたポストカードやマップの制作を進めています。是非、今回の経験を活かしてほしいものです。

(観光ホスピタリティ学科 准教授 畑井 治文)

地域健康支援ステーション

川上村保健補導員研修会を実施

川上村保健補導員会からのご依頼により、2月20日に本学にて研修会を開催いたしました。自分の状況を知ることで今後の健康づくりの実践について考えていただくことを目的に、栄養ではSATシステムによる食事診



SATシステムによる食事診断

断を行い、運動では簡易の機材を使ってできる体力測定を行い、自分の現状を客観的に評価できる体験をしていただきました。栄養素の偏りなど自分の食事の弱点が明らかにされたり、食事に気を付けている方では満点評価が出て自信がもてたなど、それぞれの食生活の振り返りができたようです。また体力測定では結果に一喜一憂し、



柔軟性の測定

家の中でも簡単にできるトレーニングに熱心に取り組む姿が見られました。学んだことを今後も続けていこうと喜んでいただけました。

(管理栄養士 飯澤 裕美)

「安曇野市自転車を活用した健康づくり実証実験」で運動指導などを展開中

2019年度の4月から10月にかけてブランディング事業推進室で請け負っている「安曇野市自転車を活用した健康づくり実証実験」の一環で、参加者の皆さんの体力測定や運動指導を行ってきました。この実証実験は3年にわたって行われることになっており、本年はその1年目でした。本学健康栄養学科の水野尚子助手による栄養指導や、安曇野市在住のMTB元オリンピック代表小林可奈子氏の自転車運動指導も行われました。参加者は安曇野市在住の男女25名で、体力測定による効果判定結果では、体重、腹囲、血圧に改善がみられ、脚の筋力や持久力の向上もみられました。来年度はさらに25名を公募し、総勢50名の健康効果を検証してまいります。

(健康運動指導士 土井 麻弓)



ファインビュー室山に自転車で登りました!

地域公開講座

ソロ・ニッチ・コスパ世代を理解する公開講座

精神科医の鈴木瞬先生をお迎えして、今の大学生を理解するための地域公開講座を開催しました。若者の特徴は3点あります。従来の権威の押し付けを嫌いつつもそれに囚われ、自分のものさ



しや仲間との共感を好み、興味の対象がきわめて狭い個人主義でコスパ重視という、極めてソロ活・ニッチ傾向が強い世代でZ世代と名付けられています。皆が集まってひとりキャンプを楽しむのは彼らの典型的な行動です。またZ世代では、我々が仮想空間と考えているインターネットの世界が、学校のクラスメイトや会社の仲間というよりも遥かに居心地が良い場所となっている現実があります。このようなZ世代から将来や仕事のことなどの悩みを聞く際に、私達がつい「〇〇であるべき」と言いたくなりますが、丁寧に本人の気持ちを聞き出し、その中から客観的な事実を拾い上げ、「私としては、〇〇したほうが良いと思います」というアイメッセージを使って、相手を尊重し心が折れない伝え方を実践していくことが重要であるとお話いただきました。

(健康科学研究科 健康栄養学科 教授 弘田 量二)

地域づくり考房『ゆめ』の活動から

「道祖神祭り」で無病息災を願う

学生プロジェクト「ええじゃん栄村」のメンバー14名は、栄村小滝地区を訪問して、住民と共に一年の健康と繁栄を祈願するとともに地区の活性化を図るために「かまくら作り」と「道祖神祭り」に参加してきました。

毎年3~4メートルの雪が降り積もるといって栄村も今年は地元の方が記憶にないというほど少ない積雪量で、訪問した時は30センチ位しかありませんでした。住民の方は、口々に今年の米作りを心配していました。メンバーは子供達と一緒に干支のネズミを象った「かまくら」を作りました。また「道祖神祭り」では、ダルマや正月飾りを持ち寄り「わらのやぐら」に付けていき、それが高く燃え上がる炎に子供も大人も歓声を上げ、一年の無病息災を祈りました。

小滝地区も少子高齢化が進み、伝統行事に取り組むことが難しくなっていると感じます。しかし、この祭りが単なるイベントではなく、文化伝承として行われているからこそその趣ある祭りだと思いました。

(地域づくり考房『ゆめ』 山岸 勝子)



一年の無病息災を祈り、わらのやぐらに飾り付け



地元の子供達とかまくら作り

学生を地域で育て 地域へ還す仕組みづくり

これまで地域づくり考房『ゆめ』では、学生プロジェクトと呼ぶグループ単位での活動支援が主でした。しかし、全学学生を対象とした地域連携窓口として教育的意義を見つめ直す中で、既存の活動に捉われず、地域活動に興味ある学生が広く参加でき、大学での学びも活かしつつ地域の中で学べる仕組みを作る必要性を強く認識しました。

そこで、次年度より活動を発展させた新しい取り組みとして松本市四賀地区を活動地域として新規事業ONE TEAMプロジェクトを開始します。詳細は追ってご報告させていただきます。

(地域づくり考房『ゆめ』 上川 由香里)

アジア賞作文コンテストで 本学留学生が活躍

昨年12月14日、松本市深志神社「梅風閣」にて、松本ワイズメンズクラブ主催の第21回



アジア賞授賞式

「アジア賞」作文コンテストの授賞式が行われました。6カ国(地域)26名の応募者の中から、優秀賞2作品と佳作3作品に本学の留学生が選出され、賞状および副賞が授与されました。作品は、会場で小冊子として配布されました。そこには文化・風習の違い、出会いやチャレンジする思いなど、それぞれの感性が表現されています。機会があれば、日本や自分を少し振り返るために、本学在学学生をはじめ皆さんにも是非読んでいただきたい作品です。(国際交流センター運営委員 青木 雄次)

見聞を広げよう! 海外研修プログラム参加学生に同窓会より支援金が贈呈される

国際交流センターのプログラムとして、本学に在籍しながら協定・提携大学に半年間あるいは1年間の留学を可能とする長期交換留学制度に加え、夏期および春期など長期休暇を利用することで、語学力を磨くだけでなく留学先の国の文化や歴史などに触れることができる本学独自の短期海外研修プログラムが用意されております。海外研修に参加する学生は毎年増加しており、本年度は45名を超えました。

これらを支援する、松本大学同窓会の「海外研修支援金制度」の支援金贈呈式が2月20日に行われ、本学の学生25名が贈呈されました。



式の中では松商短期大学部商学科の河合友香さんより韓国・東新大学での体験を、また総合経営学部総合経営学科の中野晃太郎さんよりオーストラリア・ニューカッスル大学での体験の発表がありました。

このほかに同窓会には、海外留学の促進のため、昨年度より無利子貸与の「海外留学奨学金制度」を創設していただき、海外に羽ばたき見聞を広げる学生を応援する仕組みの充実に支援をいただいています。(国際交流センター運営委員長 矢崎 久)

2019年度ハラスメント防止研修会開催

1月22日、今年度のハラスメント防止のための研修会を本学にて開催しました。演題は「スポーツとハラスメント」、講師は白井久明弁護士にお願いしました。白井氏は、スポーツ法学会名誉理事・日本スポーツとジェンダー学会会長を務めておられ、スポーツガバナンスや学校部活動等におけるハラスメントについての第一人者です。スポーツに直接かかわる教職員のみならず、全学部・学科、事務局から合わせて69名の参加がありました。



昨今、メディアを賑わすスポーツ界の不祥事やハラスメント問題ですが、その現状と課題について、具体的な事例に即してご講演いただきました。スポーツだけではなく、教育においても、身体的・精神的暴力のない環境を実現するために、成熟した指導力が求められることを教えていただきました。

(人権委員長 福島 智子)

卓上電子顕微鏡を江原孝史先生より寄贈

この度、昨年度退職された本学大学院健康科学研究科の江原孝史先生より、卓上電子顕微鏡が寄贈されました。寄贈いただいた日立 Miniscope® TM3030 Plusは、光学顕微鏡では観察できないほど微細な構造物(昆虫の眼、細胞表面や金属など)の表面状態を、特別な前処理無しの低真空環境下で観察することができます。また、反射された電子エネルギー量から観察された物体の成分も知ることができます。ミクロの世界を拡大して目で見たい、という好奇心を大いに掻き立ててくれる電子顕微鏡です。今後の私共の実験や実習に有効に活用させていただきます。

(健康科学研究科・健康栄養学科 教授 弘田 量二)

部活動情報 Club・Circle

スキー部

今年も大活躍! 更なる飛躍へ



スキー・アルペン
前田 知沙樹選手(スポーツ健康学科3年)

<主な成績>

全日本選手権SL3位、FIS Rosskopt Monte Cabvallo SL2連戦 優勝、ワールドカップ(FIN, USA, SUI, CRO)に出場
※SL=スラローム(スキーの回転競技)の略



スノーボード・ハーフパイプ
今井 胡桃選手(スポーツ健康学科2年) (写真左)

<主な成績>

ワールドカップアメリカ大会4位、中国大会6位、スイス大会8位、X GAMES準優勝
今井さんは、東京2020オリンピック聖火ランナー(4月2日実施)に選出されました。

吹奏楽部

「中部日本個人・重奏コンテスト 長野県大会」で受賞

吹奏楽部のメンバーが第18回中部日本個人・重奏コンテスト長野県大会 大学・一般の部に出場しました。初めての参加でしたが、金管五重奏は「スザート舞曲」を演奏し銅賞、木管四重奏は「喜びの島」を演奏し銀賞をいただきました。

試験期間中も時間を割いて練習した成果を出すことができました。今後もさらに腕を磨き、音楽の喜びを共有しながら活動し続けてほしいと思います。

(吹奏楽部 顧問 安藤 江里)



退職のあいさつ

帰去来

松商短期大学部商学科 教授 松原 健二



昭和61年11月、信州に旅行に来ました。その旅を終えて数日後、松商短大からの公募を見つけました。応募したところ2月に面接に呼ばれ、4月に着任しました。土地に縁ができる、とはこういう事を言うのだと思います。

以来33年間、この地で仕事をさせていただきました。思えば良き同僚や可愛い学生に恵まれて、充実した日々でした。授業だけでなく、行事や委員会もたくさん担当させていただきました。本学の益々の発展を祈念して、思い出深き松本の地を去ることにしたいと思います。

雑学を織り交ぜた講義

松商短期大学部経営情報学科 教授 藤波 大三郎



着任から12年、教職員の皆様には大変お世話になり、ありがとうございました。金融実務の現場から教育現場へと職場環境はかなり変わりましたが、有意義な時を過ごせたと感じております。学問の楽しみの一つに雑学があると思ひ、講義では実務や時事問題に関する雑学を織り交ぜ、例え話も用いてわかりやすく、面白みのある講義を目指しました。地域を担う人を育てる松本大学・松本大学松商短期大学部の更なるご発展をお祈り致します。

学生との思い出が詰まった17年間

総合経営学科 教授 葛西 和廣



松本大学に着任したのが開学の2年目でした。大学では経営学関連の科目を担当しましたが、長野県は観光の名所が多くあるので、ゼミ生と縄手通りや松本城での観光客の動向調査、さらには木曽福島や開田高原での観光客の動向調査などを10年以上行いました。ゼミ生が集まって苦労しながらアンケートの作成やデータの解析などを行ったのはよい勉強になり、よい思い出になりました。松本大学には17年間お世話になりましたが、ここでの経験を次の大学にも活かしていきたいと思っています。ありがとうございました。

跳び箱8段跳べなくなったら

スポーツ健康学科 教授 犬飼 己紀子



リタイアの決め言葉、「8段跳べなくなったら教師は辞める」とふれ歩いていたら、向き合ってきた卒業生の皆さん、ごめんなさい。やってみてはいいませんが、きっとロイター板の上で大ブレーキがかかると思います。見えもしない先を周囲に豪語すると、結果笑い飛ばされますね。変化の激しい社会をPositiveに「今を生きるEnjoy人生」。そんな一日一日を大切に過ごしていきます。皆さんに、ありがとうございました。

お世話になりました

健康栄養学科 助手 塚田 晃子



松本大学には10年間お世話になりました。大学から望む山の景色がとても綺麗で、松本の地が大好きになりました。しかし、冬の寒さには未だに慣れません。夜中にマイナス13度にまで冷えた時のことが印象に残っています。縁あって卒業した大学に勤務させていただき、学生の教育に携われたことを大変感謝しています。松本大学で積んだ経験を今後に活かせるよう頑張りたいと思います。教職員のみなさま、本当にありがとうございました。

12月よりお世話になっております

健康栄養学科 助手 三崎 紀展(令和元年12月着任)



がんや老化、エピジェネティクスに興味をもって基礎研究を続けてきました。松本の寒さにも少し慣れてきました。おそらくエピジェネティクスのおかげです。このように生活環境、栄養や運動によって健康を得られる仕組みを皆様と一緒に学んでいきたいと思っています。

学生に寄り添った支援を

教務課 教職センター 主事 河合 佑真(令和2年2月着任)



前職では青果物の営業担当をし、大学時には教育学部で体育を専攻しておりました。今回教職センターという形で教育に携わる機会をいただき嬉しく思っております。一日でも早く仕事を覚え、学生に寄り添った支援ができるよう努力いたします。よろしくお祈り致します。

新任者 あいさつ

硬式野球部

一部昇格をめざして投手コーチを招聘し投手力を強化

硬式野球部は、2月より投手コーチとして間曾晃平コーチを招聘いたしました。間曾コーチは、横浜商業高校-神奈川大学を経て独立リーグで活躍、海外リーグでのプレー経験もあり、その後、昨年まで神奈川大学硬式野球部で投手コーチとして全日本大学野球選手権出場チームの一翼を担っておりました。本学の硬式野球部も投手が20名を超え、レギュラー争いも熾烈です。間曾コーチを迎え、練習にもさらに熱が入っています。投手力の強化を図り一部昇格へ向けて部員一丸となって頑張っていきます。応援よろしくお祈りいたします。(硬式野球部 監督 清野 友二)



小さいころ不思議だったことが解けて

学校教育学科 教授 今泉 博

寒い季節を迎え、セーターを着る頃になると、いつも思い出すことがある。

羊を飼っている農家の方が、春になると羊の毛を刈るのである。大きなバリカンを巧みに動かし、一頭の毛を瞬間に刈り上げていく。その見事な仕事ぶりを、飽きずに何度も見入っていたものだ。春とは言い、まだひんやりとした空気が残っている北国である。裸ん坊にされてしまった羊を見ていると、寒くはないかと感じてしまう。

毛を刈るのは、毛糸にするためであることは知っていた。ところが、どうして5~6cm

ぐらいしかないような毛が、長い毛糸になっていくのか、不思議だったのである。短い毛を長くする一つの方法は、短い毛を次々結んでいくことだろう。でも長い毛糸には結び目がひとつもない。結ばずに、何か特別な方法で長くしているに違いないと思った。

そんな疑問を子どものころ抱いてから、何年も経ったあるときのことである。牧場のおばさんが、刈り上げた羊の毛から、毛糸を紡いでいたのである。なれた手つきで毛の繊維を上手に引きながら、撚り合わせていくのである。撚る、撚り合わせることで、長い毛糸

になっていくことを目の当たりにして驚いた。人間の知恵のすごさを実感した。

そのときのおばさんの話も、強く印象に残った。刈り上げたばかりの毛は、汚れや脂分などがついていて、普通はそれを洗い流す。でもヨーロッパの猟師さんたちは、洗わずそのままの毛糸で作ったセーターを着るといふ。脂分が付いているから、少々雨やみぞれでも浸みにくいからだそうだ。

牧場のおばさんからいい話を聞いたことで、うれしい気持ちになって、家に帰ったことを思い出す。

Information

2020オープンキャンパス [途中参加・途中退出可]

次の日程でオープンキャンパスを行います。高校生はもちろん、保護者や教員の方もぜひご参加ください。

●松商短大限定 [16フィールド体験]

[日時] 4/19(日) 10:30~15:00(受付10:00~)

[内容] 松商短大16フィールド体験、キャンパス見学ツアー、進路・入試・奨学金相談、保護者相談、ランチ無料体験 etc.



●松本大学・松商短大 同時開催

[日時] 5/24(日) 6/21(日) 7/12(日) 8/2(日) 8/23(日) 9/26(土) 10:30~15:00 (受付10:00~)

[内容] 松本大学・松商短大概要説明、学科説明、ミニ講義、トレーニングルーム見学、ランチ無料体験、キャンパス見学ツアー、個別相談(入試・授業・資格・就職・学生なんでも相談) etc.

詳しくはホームページでご確認いただくか、入試広報室までお問い合わせください。
☎0120-507-200



無料シャトルバス運行

長野県内<松本駅、長野駅、上田駅、佐久平駅、岡谷駅、下諏訪駅、茅野駅、伊那(上伊那農業高校前)、飯田駅>・山梨県<甲府駅、小淵沢駅>、新潟県<新潟駅、高田駅>、群馬県<高崎駅>からシャトルバス運行
※松本駅以外要予約 ※高崎駅は7・8月限定運行予定

硬式野球部公式戦の日程

関甲新学生野球連盟春季2部リーグ戦

※球場が変更になる場合があります。

節	月	日	曜	対戦カード	開始時間	会場
第1節	4	4	土	松本大学一埼玉大学	12:00	松本大学野球場
		5	日	埼玉大学一松本大学	12:00	
第3節	4	18	土	常磐大学一松本大学	12:00	常磐大学野球場
		19	日	松本大学一常磐大学	12:00	
第4節	4	25	土	関東学園大学一松本大学	12:00	関東学園大学野球場
		26	日	松本大学一関東学園大学	12:00	
第5節	5	2	土	松本大学一新潟大学	12:00	松本大学野球場
		3	日	新潟大学一松本大学	12:00	
第7節	5	16	土	松本大学一宇都宮大学	12:00	松本大学野球場
		17	日	宇都宮大学一松本大学	12:00	

新型コロナウイルス感染症への対応・今後の行事予定について

新型コロナウイルスによる感染症の発生・拡大に対し、本学ホームページにて随時情報を発信しております。各種行事予定などにつきましても延期・中止となる場合にはホームページにてご案内いたします。何卒ご理解・ご了承のほどよろしくお願い申し上げます。

編集後記

信州の長い冬も終わりが近づき、間もなく暖かな春がやって来ます。春は桜の季節。ですが、桜は暖かくなるだけで花を咲かせることはありません。桜は夏には花芽という小さな芽をすでに付け、秋までにそこに花を咲かすための力を一生懸命蓄えていきます。そして花芽は、その蓄えた力で冬の厳しい寒さの中で再び開花の準備を始め、耐え抜けた花芽だけが、蕾となって膨らみやがて美しい花を咲かせます。桜が春に咲くためには、春以外の季節を乗り越える力が必要なのです。

間もなく松本大学・松商短期大学部を巣立っていく皆さんも、今日まで様々な壁を乗り越えて、卒業、修了を迎えました。この春、眩しいほど綺麗な花を咲かせた皆さんが、次のステージでさらに美しい花を咲かせることを心より祈っています。(記・入試広報室長 坂内 浩三)